

Title	スペイン語既習クラスにおける高大連携についての調査報告
Sub Title	Exploring possible cooperation in foreign language education between Keio's secondary schools and college : a survey in Spanish classes for undergraduates who already studied Spanish prior to university
Author	丸田, 千花子(Maruta, Chikako)
Publisher	慶應義塾大学外国語教育研究センター
Publication year	2014
Jtitle	慶應義塾外国語教育研究 (Journal of foreign language education). Vol.11, (2014.) ,p.97- 115
JaLC DOI	
Abstract	This report shows the result of a survey conducted on undergraduates of Keio University who have already studied Spanish in primary and/or secondary school. The forty-four questions aim to clarify the following four points: the overall situation of Spanish classes, suggestions from students to improve in-class learning environments, reasons for students' choice of Spanish at high school and university, and language skills gained in high school. The survey sheds light on how students' purpose of learning Spanish has changed from high school to university. Results show that students of Spanish classes have chosen Spanish to learn speaking and listening skills, rather than reading and writing skills or Hispanic culture. In addition, they wish to have some kind of index to know their Spanish level. The result also highlight several issues to be resolved in order to provide students better learning environments: an ideal cooperation in foreign language education among Keio secondary schools and university, elaborating curriculum or teaching material to be shared among schools in Keio for improving students' language skills, and stimulating students' motivation to learn foreign languages.
Notes	調査・実践報告
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA12043414-20140000-0097

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

スペイン語既習クラスにおける 高大連携についての調査報告

丸 田 千花子

This report shows the result of a survey conducted on undergraduates of Keio University who have already studied Spanish in primary and/or secondary school. The forty-four questions aim to clarify the following four points: the overall situation of Spanish classes, suggestions from students to improve in-class learning environments, reasons for students' choice of Spanish at high school and university, and language skills gained in high school. The survey sheds light on how students' purpose of learning Spanish has changed from high school to university. Results show that students of Spanish classes have chosen Spanish to learn speaking and listening skills, rather than reading and writing skills or Hispanic culture. In addition, they wish to have some kind of index to know their Spanish level. The result also highlight several issues to be resolved in order to provide students better learning environments: an ideal cooperation in foreign language education among Keio secondary schools and university, elaborating curriculum or teaching material to be shared among schools in Keio for improving students' language skills, and stimulating students' motivation to learn foreign languages.

1. はじめに

本稿は、大学入学以前に第二外国語の学習経験者を対象としたクラス（「既習クラス」）で行った高校と大学の連携（以下、高大連携）に対する意識調査の中の、スペイン語クラスにおける調査結果の報告である。この調査は英語を含む複数の外国語の一貫教育における複言語・複文化能力養成を対象とした研究の一部である。また調査目的は、慶應義塾における外国語教育の一貫性についての現状の把握と、学生の習熟度を正確に計ることのできるプログラム開発などの学習環境の整備である。本稿では学生向け調査の結果を用いて、スペイン語既習クラスの現況と学生の授業に対する要望を示す。また高校履修開始時と卒業時、また大学入学時の3つの時点における第二外国語学習に対する学生の意識の相違点を明らかにし、高大連携に関す

る現状と課題について考察する。

2. 調査の概要

2.1 調査の時期と対象者

調査対象者は、日吉・三田両キャンパスに設置されている第二外国語（ドイツ語、フランス語、中国語、スペイン語）の1年生既習クラスと2年生既習クラスを履修している1年から4年までの学生、当該科目を担当した経験のある専任と非常勤の教員、そして慶應義塾一貫校の第二外国語専任教員の3者である。調査実施時に既習クラスが設置されていた学部は 文学部、経済学部、商学部、法学部（法律学科・政治学科）、理工学部、医学部の6学部である。既習クラスの内容や学生の選考基準は学部によって異なり、同一学部内でも語種ごとに異なる。

調査時期は、予備調査を2012年11月、本調査を2012年12月から2013年1月にかけて行った。予備調査は、学生向けは中国語2年生クラス14名、教員向けは既習クラスの担当経験者3名と一貫校教員3名に対して行われた。予備調査の結果、質問票や調査方法に改善する点はなく、予備調査で使用した質問票を本調査でも使用した。

2.2 有効回答数

今回の調査対象者と有効回答の数（完全回答数）は学生 358/647 人（55%）、大学教員 39/70 人（55%）、一貫校教員 3/3 人（100%）である。スペイン語は学生 26/28 名（93%）、大学教員は教員 3/4 名（75%）から回答を得た。

2.3 調査手法

調査結果の分析は、平均と標準偏差により5段階のスケール尺度（5：あてはまる、4：どちらかというにあてはまる、3：どちらともいえない、2：どちらかというにあてはまらない、1：あてはまらない）を用いた。本稿では全学部と全語種を合計した大学全体、1年生クラスと2年生クラスを合計したスペイン語全体、スペイン語1年生、そしてスペイン語2年生の4つのグループの回答数値の分析結果を提示する。また $\mu + \sigma$ は「平均+標準偏差」であり、点数を高くつける人の意識を表し、5以上を天井効果とする。 $\mu - \sigma$ は「平均-標準偏差」であり、点数を低くつける人の意識を表し1以下はフロア効果とする。

2.4 調査質問票⁽¹⁾

調査質問票の質問数は、大学生向けが44問（内記述3問）、大学教員向けが24問（内記述2問）、一貫校教員向けが21問（内記述3問）であり、学生向けの質問票は以下の通りテーマごとに分類することができる。特に④から⑥は学習の節目となる3つの時点での言語選択の理

由と「読む、書く、話す、聞く」の四技能の習得などについて質問しており、これらを比較することで学生の意識の変化を読み取ることができる。

- ① 属性 (12S1～12S11)
- ② クラスの現況 (12S12～12S15)
- ③ 学習環境改善のための要望 (12S16～12S17、12S39～12S40)
- ④ 高校履修開始時の言語選択理由と重視した能力
 - ④－１．当該言語の選択理由 (12S18～12S23)
 - ④－２．習得を重視した能力 (12S24～12S27、四技能)
- ⑤ 高校卒業時に習得した能力 (12S28～12S31、四技能と文化の説明)
- ⑥ 大学入学時の言語を継続学習した理由
 - ⑥－１．学習を継続した理由 (12S32～12S36、四技能の習得と文化の学習)
 - ⑥－２．学習を継続した理由・上記以外 (12S37～12S38)
- ⑦ 気づき (12S41～12S44)

3. スペイン語既習クラスにおける調査と現況

調査実施時にスペイン語既習クラスを設置していた学部は経済学部、法学部と商学部の3学部だった。経済学部では1年生は必修科目として1クラス、2年生は選択必修科目として2クラスが設置されていた。商学部は、法学部と合同で1年生クラスを1コマのみ開講していた。スペイン語の調査対象者は前述の通り合計26名であり、内訳は1年生が12名（経済学部9名、法学部3名）、2年生が14名（経済学部）である。

本稿では前述の②から⑥について回答と分析結果を示すとともに、④から⑥の高大連携に関連する質問群を中心に、高校履修開始時、高校卒業時と大学入学時の3時点における言語選択理由と言語運用能力等の習得状況を比較し、回答値から読みとることのできるスペイン語履修学生の意識の変化を明らかにする。

3.1 属性

1年生の調査対象者12名の内、高校からスペイン語の学習を始めた学生は7名、高校以前に学習経験のある学生は5名である。また2年生の調査対象者14名の内、高校からの学習者は10名、高校以前の学習者は4名である。今回の調査対象の既習クラスには高校入学以前にスペイン語学習の経験のある学生、また慶應義塾一貫校の中でスペイン語クラスを設置している慶應義塾湘南藤沢高等部、慶應義塾ニューヨーク学院（高等部）、慶應義塾志木高等学校での学習経験のある学生が含まれる。

3.2 スペイン語既習クラスの現況 (12S12~12S15)

この質問群は高大連携 (12S12)、既習クラスの意義 (12S13、12S15)、大学の授業の難易度 (12S14) の4つの質問の回答から既習クラスの現況とクラスに対する学生の要望を明らかにする。

12S12. 高校と大学の授業で連携が取れている⁽¹⁾。

	ID*	平 均	標準偏差	$\mu + \sigma$	$\mu - \sigma$
全 体	12S12	2.413	1.252	3.665	1.161
スペイン語全体	12S12	2.346	1.355	3.701	0.991
スペイン語1年生	12S12	2.417	1.379	3.796	1.038
スペイン語2年生	12S12	2.286	1.383	3.668	0.903

*ID は質問票の質問番号をさす。

12S13. 大学で既習クラスがあった方がよい。

	ID	平 均	標準偏差	$\mu + \sigma$	$\mu - \sigma$
全 体	12S13	4.271	1.091	5.362	3.180
スペイン語全体	12S13	4.538	0.948	5.486	3.591
スペイン語1年生	12S13	4.833	0.389	5.223	4.444
スペイン語2年生	12S13	4.286	1.204	5.490	3.081

12S14. 大学の授業の方が高校の授業より簡単だ。

	ID	平 均	標準偏差	$\mu + \sigma$	$\mu - \sigma$
全 体	12S14	2.611	1.284	3.895	1.327
スペイン語全体	12S14	2.462	1.334	3.795	1.128
スペイン語1年生	12S14	3.000	1.128	4.128	1.872
スペイン語2年生	12S14	2.000	1.359	3.359	0.641

12S15. 既習クラスで勉強していればより高いレベルまで到達できる。

	ID	平均	標準偏差	$\mu + \sigma$	$\mu - \sigma$
全 体	12S15	3.486	1.207	4.693	2.279
スペイン語全体	12S15	3.154	1.255	4.409	1.899
スペイン語1年生	12S15	3.667	0.778	4.445	2.888
スペイン語2年生	12S15	2.714	1.437	4.152	1.277

この質問群におけるスペイン語全体の回答結果は、大学全体の傾向とほぼ同様であり、「高校と大学の連携は取れていない」、「既習クラスはあった方がよい」、「大学の授業は高校よりも簡単ではない」、「既習クラスでの学習によりおおむね高いレベルに到達することができる」という結果を示している。学年別では、1年生が他のグループ（大学全体、スペイン語全体、2年生）より4つの質問の平均値が高く、既習クラスでの学習に期待している。一方、2年生の数値は他のグループよりも若干低く、特に12S14「大学の授業の難易度」の $\mu - \sigma$ は0.641とフロア効果を示し、大学の授業は難しいと考えている学生が多い。

個別の質問については、12S12「高大連携」では全グループの平均値は2点台と低く、特にスペイン語全体と2年生の $\mu - \sigma$ は1以下のフロア効果を示している。この結果の背景として、調査実施時点でスペイン語科目を設置している慶應義塾一貫校と大学教員との間の懇談会、あるいは教材やカリキュラムの連携がないことが数値に表れたと考えられる。次に12S13「既習クラス設置」では、全グループの平均値が4点台、 $\mu + \sigma$ が5点台で高い数値を示している。特にスペイン語は大学全体よりも平均、 $\mu + \sigma$ 、 $\mu - \sigma$ の数値が高く、学生は既習クラスを支持している。学年別では、1年生の平均値は天井効果に近い4.833であり、2年生は $\mu + \sigma$ が5.490と天井効果を示している。12S14「大学授業の難易度」については、スペイン語全体では大学全体より平均、 $\mu + \sigma$ 、 $\mu - \sigma$ の数値が少し低く、「大学の授業は高校の授業より簡単ではない」と学生が認識している。しかし学年別をみると1年生と2年生の数値に開きがある。平均値は1年生が3点、2年生が2点、 $\mu + \sigma$ は1年生が4.128、2年生が3.359、そして $\mu - \sigma$ は1年生が1.872、2年生0.641であり、2年生の方がより大学の授業の難易度が高いという意識をもっている。12S15「既習クラスでの学習により高いレベルまで到達できる」という質問の回答では各グループの数値にばらつきがみられる。スペイン語全体の数値は大学全体とほぼ同じ値であり、平均が3点台、 $\mu + \sigma$ も4点台である。スペイン語履修学生は既習クラスで学ぶことにより高いレベルに到達できると認識している。しかし学年別では1年生と2年生の数値に大きな開きがある。1年生の平均は大学全体やスペイン語全体より少し高い3.667だが、2年生は他のグループより低く、平均=2.714、 $\mu + \sigma$ =4.152、 $\mu - \sigma$ =1.277であり、

高いレベルに到達できると考えていない学生が多いといえる。上記の分析結果から、スペイン語における高大連携は取られていないが、既習クラスでの学習はスペイン語運用能力を向上できると学生が認識していることから、今後高大連携の必要性や授業運営の場で学生の学習のモチベーションを一層高められるような工夫について考えることが必要である。

3.3 授業に対する提案と要望 (12S16～12S17、12S39～12S40)

この質問群の4つの質問は、当該言語母語話者の先生による授業 (12S16)、習熟度がわかるプログラムにそった学習 (12S17)、一貫性を考慮したテキストの使用 (12S39)、英語による文法説明 (12S40) であり、既習クラスでの学習効果を高めるための工夫や提案について明らかにする。

12S16. すべての授業で当該言語母語話者（当該言語のネイティブ）の先生が教えてくれた方がよい。

	ID	平 均	標準偏差	$\mu + \sigma$	$\mu - \sigma$
全 体	12S16	2.798	1.346	4.144	1.451
スペイン語全体	12S16	3.520	1.262	4.782	2.258
スペイン語1年生	12S16	3.545	1.214	4.759	2.332
スペイン語2年生	12S16	3.500	1.345	4.845	2.155

12S17. 自分の習熟度がわかるプログラムにそって勉強したい。

	ID	平 均	標準偏差	$\mu + \sigma$	$\mu - \sigma$
全 体	12S17	3.879	1.053	4.932	2.826
スペイン語全体	12S17	3.923	0.977	4.900	2.946
スペイン語1年生	12S17	4.167	0.835	5.002	3.332
スペイン語2年生	12S17	3.714	1.069	4.783	2.645

12S39. 同じ学校だから、高校・大学の第二外国語教育の一貫性を考慮したテキストを、高校や大学の授業で使用してほしい。

	ID	平 均	標準偏差	$\mu + \sigma$	$\mu - \sigma$
全 体	12S39	3.349	1.372	4.722	1.977
スペイン語全体	12S39	2.846	1.405	4.252	1.441
スペイン語1年生	12S39	2.417	1.379	3.796	1.038
スペイン語2年生	12S39	3.214	1.369	4.583	1.845

12S40. 高校・大学の第二外国語の授業において、英語文法と比較しながら文法の説明をしたらわかりやすいと思う。

	ID	平 均	標準偏差	$\mu + \sigma$	$\mu - \sigma$
全 体	12S40	3.130	1.286	4.416	1.844
スペイン語全体	12S40	3.654	1.355	5.009	2.299
スペイン語1年生	12S40	3.833	1.337	5.170	2.496
スペイン語2年生	12S40	3.500	1.401	4.901	2.099

この質問群に関して平均値からみた順位は、大学全体では「12S17 習熟度プログラム (3.879) > 12S39 テキスト (3.349) > 12S40 英語文法との比較説明 (3.130) > 12S16 ネイティブ教員による授業 (2.798)」である。一方、スペイン語各グループの順位は大学全体と異なる。スペイン語全体と1年生はともに「12S17 習熟度プログラム (3.923、4.167) > 12S40 英語文法との比較説明 (3.654、3.833) > 12S16 ネイティブ教員による授業 (3.520、3.545) > 12S39 テキスト (2.846、2.417)」, 2年生は「12S17 習熟度プログラム (3.714) > 12S40 英語文法との比較説明 (3.500) = 12S16 ネイティブ教員による授業 (3.500) > 12S39 テキスト (3.214)」である。スペイン語各グループの共通点は、1位が12S17「習熟度のわかるプログラムにそって勉強したい」、2位が12S40「英語文法と比較して文法説明をしてほしい」という点である。2年生は2位が12S16「ネイティブ教員による授業」も加わるが、スペイン語母語話者の教員による授業は1年生でもニーズが高い。このニーズの高さは後述する高校履修開始時や大学入学時におけるスペイン語を選択した理由—12S20「会話能力を高めるため」—と関係していると考えられる。一方、一貫性を考慮したテキストの使用に対する希望は他の項目と比べて数値が低い。

個別の質問について、12S16「ネイティブ教員による授業」はスペイン語では大学全体の平均、 $\mu + \sigma$ 、 $\mu - \sigma$ の数値を大きく上回り、平均=3.5以上、 $\mu + \sigma = 4.7$ 以上という高い数値

で、学生からの要望が高い。12S17「習熟度にそったプログラム」に対する要望は、大学全体とスペイン語各グループの平均が3.714から4.167、 $\mu + \sigma$ が4.783から5.002、 $\mu - \sigma$ が2.645から3.332と高い数値となっている。特に1年生の数値は他のグループよりも高く、 $\mu + \sigma = 5.002$ と天井効果がみられる。また2年生の数値は他のグループより平均、 $\mu + \sigma$ 、 $\mu - \sigma$ のすべてにおいて低く、大学での学習初年度の1年生の方が習熟度プログラムにそった学習を望んでいる。また習熟度プログラムに対する要望が大学全体よりスペイン語の方がやや高い理由は、スペイン語クラスの学生の多様なレベルも影響していると考えられる。スペイン語クラスでは一貫校で学習を始めた内部進学者と、スペイン語圏の居住経験者や海外の学校でスペイン語を学習した経験のある外部からの学生者が混在する場合があります、年度によって学生の習熟度レベルに大きな差が生じる。内部進学者は通常スペイン語の学習期間は1年（ないしは2年）だが、外部からの学生は学習年数も短期間から長期間までさまざまである。このように異なる学習経験をもつ学生が混在するスペイン語クラスでは、学生が自分の学習レベルを把握できる指標を特に求めていると考えられる。また12S39「一貫性を考慮したテキスト使用」について、スペイン語全体と1年生の平均は2点台、2年生は3.214と大学全体の平均より低く、4つの質問群の中でも最下位の数値である。1年生はほぼすべての回答で数値が他のグループよりも高いが、このテキスト使用については他のグループよりも低く、 $\mu - \sigma = 1.038$ とフロア効果に近い。またS12S40「英語文法と比較しながらのスペイン語文法説明」について、スペイン語は大学全体よりも各項目の数値が20%ほど高い。スペイン語各グループの平均は3.5以上、 $\mu + \sigma$ が4.9以上、 $\mu - \sigma$ が2.09以上と高い水準であり、スペイン語全体と1年生の $\mu + \sigma$ では天井効果も示している。この背景にはスペイン語の時制が多様で複雑であることも影響していると考えられる。スペイン語の時制には英語にあっても日本語にないものがある。学生からすると日本語にない時制を日本語で説明されるよりも、英語文法と対比して説明してもらった方が理解しやすい場合もある。1年生の数値が2年生よりも高いのは、初級文法の複雑な時制を学習し終えた直後の学期末に調査を実施したことも関係すると考えられる。

4. 高校履修開始時のスペイン語選択理由 (12S23～12S27)

これ以降の章において、第二外国語の中から高校履修開始時と大学入学時においてスペイン語を選択した理由と高校卒業時に習得した能力に対する学生の認識を明らかにする。高校履修開始時と大学入学時のスペイン語の選択理由についての質問は「読む、書く、話す、聞く」の四技能の習得と、スペイン語や地域文化に対する興味や学習について、また高校卒業時の質問は四技能の習得と地域文化の説明する能力の習得状況についてである。この質問群の回答から、高校履修開始時、高校卒業時、大学入学時の3つの時点で学生が重要視している能力や興味を把握することができる。またこの結果は今後の学習環境の改善や高大連携を考える上で大いに

役立つと考えられる。

4.1 高校履修開始時のスペイン語選択理由：四技能以外（12S18～12S19、12S22～12S23）

この質問群は、学習継続の意思（21S23）、言語への興味（12S18）、地域文化への興味（12S19）、コミュニケーション（12S22）の4つの質問から成り、高校履修開始時のスペイン語選択理由を四技能の向上以外から明らかにする。

12S23. 高校で英語以外の外国語を選択したとき、大学まで学習を継続するつもりだった。

	ID	平 均	標準偏差	$\mu + \sigma$	$\mu - \sigma$
全 体	12S23	4.113	1.211	5.324	2.902
スペイン語全体	12S23	4.208	0.932	5.140	3.277
スペイン語1年生	12S23	4.500	0.707	5.207	3.793
スペイン語2年生	12S23	4.000	1.038	5.038	2.962

12S18. 高校で英語以外の外国語を選択した理由は、他の外国語よりも興味深いと思ったからである。

	ID	平 均	標準偏差	$\mu + \sigma$	$\mu - \sigma$
全 体	12S18	3.272	1.469	4.741	1.803
スペイン語全体	12S18	2.458	1.414	3.872	1.045
スペイン語1年生	12S18	3.200	1.398	4.598	1.802
スペイン語2年生	12S18	1.929	1.207	3.135	0.722

12S19. 高校で英語以外の外国語を選択した理由は、その言語が使用されている地域の文化に興味があったからである。

	ID	平 均	標準偏差	$\mu + \sigma$	$\mu - \sigma$
全 体	12S19	3.116	1.450	4.566	1.666
スペイン語全体	12S19	2.792	1.444	4.236	1.348
スペイン語1年生	12S19	3.100	1.449	4.549	1.651
スペイン語2年生	12S19	2.571	1.453	4.024	1.119

12S22. 高校で英語以外の外国語を選択した理由は、選択した言語を話す人々とコミュニケーションをとりたかったからである。

	ID	平 均	標準偏差	$\mu + \sigma$	$\mu - \sigma$
全 体	12S22	3.110	1.447	4.557	1.664
スペイン語全体	12S22	3.208	1.560	4.768	1.649
スペイン語1年生	12S22	3.600	1.578	5.178	2.022
スペイン語2年生	12S22	2.929	1.542	4.471	1.386

12S23「学習の継続」については、大学全体、スペイン語の各グループともに高い数値を示し、全グループの $\mu + \sigma$ は天井効果を示している。この回答結果から、大学入学以前にスペイン語を学習した経験をもつ学生はそのまま継続してスペイン語を学習する意思があることがわかった。

次に12S23以外の質問の結果を検証すると、大学全体では「他の外国語より興味深かった」が理由の1位だが、スペイン語では「コミュニケーションをとりたかったから」が1位である。全グループについて、平均値から選択理由の順位を示すと、大学全体は「12S18 言語への興味 (3.272) > 12S19 地域文化への興味 (3.116) $\approx$ 12S22 コミュニケーション (3.110)」、スペイン語全体は「12S22 コミュニケーション (3.208) > 12S19 地域文化への興味 (2.792) > 12S18 言語への興味 (2.458)」、1年生は「12S22 コミュニケーション (3.600) > 12S18 言語への興味 (3.200) > 12S19 地域文化への興味 (3.100)」、2年生は「12S22 コミュニケーション (2.929) > 12S19 地域文化への興味 (2.571) > 12S18 言語への興味 (1.929)」である。1年生は「スペイン語への興味」と「スペイン語圏地域文化への興味」がほぼ同じ値であり、等しく興味があることがわかる。

個別の質問について、12S18「他の外国語よりも興味深いから」はスペイン語各グループの数値は大学全体よりも低く、スペイン語への興味からスペイン語を選択したのではないことがわかる。学年別では、1年生は平均が3.200だが、 $\mu + \sigma$ と $\mu - \sigma$ の数値に幅があり、1年生の中でも興味の程度にばらつきがみられる。一方、2年生は平均が1.929、 $\mu - \sigma$ が0.722とフロア効果がみられ、スペイン語を選択した理由は言語への興味以外であることを示している。また12S19「地域文化への興味」はスペイン語各グループとも平均や $\mu - \sigma$ の数値にばらつきがみられるが、 $\mu + \sigma$ はいずれも4点台であり、四技能の習得と同時に地域文化への興味も言語選択の理由になっている。12S22「コミュニケーション」については、スペイン語は大学全体よりもやや数値が高く、スペイン語話者とコミュニケーションをとることを目的にスペイン語を選択した学生が多い。学年別では1年生の数値が2年生よりも高く、 $\mu + \sigma = 5.178$ と天

井効果を示している。

4.2 高校履修開始時のスペイン語選択理由：四技能（12S24～12S27）

この質問群では、高校履修開始時に四技能—読む（12S24）、書く（12S25）、会話（12S26）、リスニング（12S27）—の中で学生が習得を重要視する技能について明らかにする。

12S24. 高校での履修開始時、読む能力の習得を最も重視していた。

	ID	平 均	標準偏差	$\mu + \sigma$	$\mu - \sigma$
全 体	12S24	2.912	1.338	4.249	1.574
スペイン語全体	12S24	2.833	1.239	4.073	1.594
スペイン語1年生	12S24	3.273	1.272	4.545	2.001
スペイン語2年生	12S24	2.462	1.127	3.588	1.335

12S25. 高校での履修開始時、書く能力の習得を最も重視していた。

	ID	平 均	標準偏差	$\mu + \sigma$	$\mu - \sigma$
全 体	12S25	2.961	1.255	4.216	1.705
スペイン語全体	12S25	2.615	1.235	3.851	1.380
スペイン語1年生	12S25	2.583	1.240	3.823	1.343
スペイン語2年生	12S25	2.643	1.277	3.920	1.365

12S26. 高校での履修開始時、会話・コミュニケーション能力の習得を最も重視していた。

	ID	平 均	標準偏差	$\mu + \sigma$	$\mu - \sigma$
全 体	12S26	3.084	1.302	4.386	1.783
スペイン語全体	12S26	3.846	1.120	4.967	2.726
スペイン語1年生	12S26	3.500	1.243	4.743	2.257
スペイン語2年生	12S26	4.143	0.949	5.092	3.194

12S27. 高校での履修開始時、リスニング能力の習得を最も重視していた。

	ID	平 均	標準偏差	$\mu + \sigma$	$\mu - \sigma$
全 体	12S27	2.882	1.282	4.164	1.600
スペイン語全体	12S27	3.308	1.258	4.565	2.050
スペイン語1年生	12S27	3.083	1.443	4.527	1.640
スペイン語2年生	12S27	3.500	1.092	4.592	2.408

四技能の中では、大学全体、スペイン語各グループともに12S26「会話・コミュニケーション能力の習得を最も重視していた」の回答数値が高い。これは高校履修開始時にスペイン語を選択した有力な理由が12S12「コミュニケーションをとるため」という回答と連動している。また平均値から学生が重要視する四技能の順位を示すと、大学全体は「12S26 会話 (3.084) > 12S25 書く (2.961) ≒ 12S24 読む (2.912) > 12S27 リスニング (2.882)」であり、四技能間の数値に大きな差はなく、いずれの技能の習得も重要視されている。一方、スペイン語各グループでは対面型のコミュニケーションに必要な能力である「話す、聞く」の習得が「読む、書く」よりも重視され、数値にも大きな差として表れている。平均値からみる四技能の順位は、スペイン語全体では「12S26 会話 (3.846) > 12S27 リスニング (3.308) > 12S24 読む (2.833) > 12S25 書く (2.615)」、1年生は「12S26 会話 (3.500) > 12S24 読む (3.273) > 12S27 リスニング (3.083) > 12S25 書く (2.583)」、2年生は「12S26 会話 (4.143) > 12S27 リスニング (3.500) > 12S25 書く (2.643) > 12S24 読む (2.462)」である。

また個別の技能については、12S24「読む能力」の回答数値は大学全体とスペイン語全体がほぼ同じ値であり、1年生の各項目の数値は全グループの中で最も高い。逆に2年生の各項目の数値は全グループの中で最下位であり、1年生よりも数値が20%以上低い。このように2年生の数値はやや低いものの、全体的にみると高校履修開始時に「読む能力の習得」は決して軽視されているわけではない。次に12S25「書く能力」について、スペイン語各グループの平均値は大学全体よりも10%ほど低く、書く能力を重視する傾向がやや低い。スペイン語の中では各項目の数値はほぼ同じ値であり、スペイン語全体として書く能力への関心が高くない。12S26「会話能力」については、前述の通り四技能の中で1位であり、スペイン語各グループは大学全体より平均値等の数値が高く、会話能力の習得が重要視されている。特に2年生は、他の回答結果では大学全体やスペイン語グループよりも低い数値を出すことが多いものの、この12S26「会話能力」に関しては各項目の数値が高く、平均=4.143、 $\mu - \sigma = 3.194$ 、 $\mu + \sigma$ は5.092という天井効果を示し、会話能力の習得に強い関心と意欲がある。12S27「リスニング能力」は、大学全体では四技能の中で最下位だが、スペイン語では2位または3位に入り、「会

話能力」に次いで習得が重要視されている。また学年別では1年生と2年生はともに $\mu + \sigma$ が4.5以上と高い水準を示すが、1年生の $\mu - \sigma$ は1.640であり、2年生よりも1年生の中でのばらつきがみられる。

5. 高校卒業時に習得した能力（12S28～12S31）

この質問群は高校卒業時に習得した能力を四技能の習得（12S28～12S30）と地域文化を説明する能力（12S31）から明らかにする。

12S28. 高校を卒業したとき、辞書を用いれば簡単な文を読む能力が身についた。

	ID	平 均	標準偏差	$\mu + \sigma$	$\mu - \sigma$
全 体	12S28	3.753	1.234	4.986	2.519
スペイン語全体	12S28	3.769	1.451	5.220	2.319
スペイン語1年生	12S28	3.833	1.337	5.170	2.496
スペイン語2年生	12S28	3.714	1.590	5.304	2.124

12S29. 高校を卒業したとき、辞書を用いれば簡単な文章を書く能力が身についた。

	ID	平 均	標準偏差	$\mu + \sigma$	$\mu - \sigma$
全 体	12S29	3.326	1.231	4.557	2.095
スペイン語全体	12S29	3.654	1.263	4.917	2.391
スペイン語1年生	12S29	3.583	1.379	4.962	2.204
スペイン語2年生	12S29	3.714	1.204	4.919	2.510

12S30. 高校を卒業したとき、簡単な日常会話を当該言語母語話者とやりとりする能力が身についた。

	ID	平 均	標準偏差	$\mu + \sigma$	$\mu - \sigma$
全 体	12S30	2.343	1.263	3.606	1.080
スペイン語全体	12S30	3.038	1.455	4.494	1.583
スペイン語1年生	12S30	2.500	1.508	4.008	0.992
スペイン語2年生	12S30	3.500	1.286	4.786	2.214

12S31. 高校を卒業したとき、学習した言語の国や文化について簡単な説明をする能力が身についた。

	ID	平 均	標準偏差	$\mu + \sigma$	$\mu - \sigma$
全 体	12S31	2.348	1.277	3.625	1.071
スペイン語全体	12S31	2.538	1.334	3.872	1.205
スペイン語1年生	12S31	2.833	1.528	4.361	1.306
スペイン語2年生	12S31	2.286	1.139	3.424	1.147

平均値から高校卒業時に習得した能力の順位をみると、大学全体は「12S28 読む (3.753) > 12S29 書く (3.326) > 12S31 文化の説明 (2.348) = 12S30 会話 (2.343)」, スペイン語全体は「12S28 読む (3.769) > 12S29 書く (3.654) > 12S30 会話 (3.038) > 12S31 文化の説明 (2.538)」, 1年生は「12S28 読む (3.833) > 12S29 書く (3.583) > 12S31 文化の説明 (2.833) > 12S30 会話 (2.500)」, 2年生が「12S28 読む (3.714) = 12S29 書く (3.714) > 12S30 会話 (3.500) > 12S31 文化の説明 (2.286)」である。全グループに共通する1位、2位は「読む能力」と「書く能力」である。特に12S28「読む能力」について、スペイン語各グループの $\mu + \sigma$ は5以上と天井効果を示し、学生は十分に習得したと認識している。学年別では1年生の $\mu + \sigma$ と $\mu - \sigma$ との数値幅が小さく、1年生全体として「読む能力は身についた」といえる。一方、2年生は $\mu + \sigma$ と $\mu - \sigma$ の数値幅が他のグループより大きく、学年内で習得の程度にばらつきがみられる。12S29「書く能力」について、スペイン語グループの数値は大学全体よりも10%ほど高く、平均が3.5以上、 $\mu + \sigma$ が天井効果に近い4.9以上、 $\mu - \sigma$ が2.2以上である。「書く能力」は「読む能力」と同様、十分に習得したという認識がある。

「読む、書く」の2つの能力以外についてはグループにより結果が異なる。12S30「当該母語話者とのやりとり」について、スペイン語全体では大学全体よりも平均、 $\mu + \sigma$ 、 $\mu - \sigma$ の数値が高く、簡単な会話をスペイン語母語話者とやりとりする能力は身についたという認識があるが、1年生と2年生の数値には差がある。1年生の数値はスペイン語グループ内では最下位であり、 $\mu - \sigma$ も1以下の0.992とフロア効果を示す。また $\mu + \sigma$ と $\mu - \sigma$ の数値の差も大きく、1年生の中で習得したという認識にばらつきがみられる。一方、2年生の数値はスペイン語グループ内で最も高く、 $\mu + \sigma$ と $\mu - \sigma$ の数値の差も小さく、やりとりする能力を習得したという認識がある。次に全グループの12S31「文化について簡単な説明をする能力」の数値は「読む、書く、会話」より低く、「文化について説明する能力が身についた」とはいえない。大学全体の $\mu - \sigma$ は1.071とフロア効果に近いが、スペイン語全体の数値は大学全体よりやや高い。学年別では1年生の数値が全グループの中で最も高く、高校履修開始時の「12S19 地域

文化への興味」の回答数値も1年生は2年生より高い。このことから1年生は2年生より地域文化に対する関心を示した分、習得もできたといえる。一方、2年生の数値は全グループの中で最も低く、地域文化を説明する能力を習得したという認識があまりない。また高校履修開始時の回答数値も全グループの中で大幅に低い。この結果から、高校履修開始時にみせた関心の程度は高校卒業時の習得状況にも影響すると考えられる。

6. 大学入学時のスペイン語選択理由（12S32～12S36）

この質問群では、大学入学時に高校で学習した言語を継続して学習することにした理由を明らかにする。高校履修開始時や高校卒業時と同様、四技能—読む、書く、話す（会話・コミュニケーション）、聞く（12S32～12S35）—と地域文化の学習（12S36）の4つの質問から学生の意識を検証する。

12S32. 大学に入学したとき、高校で学習した言語を引き続き選択した理由は、読む能力をさらに高めたいと思ったからである。

	ID	平 均	標準偏差	$\mu + \sigma$	$\mu - \sigma$
全 体	12S32	3.651	1.267	4.918	2.383
スペイン語全体	12S32	3.423	1.419	4.842	2.004
スペイン語1年生	12S32	3.667	1.231	4.898	2.436
スペイン語2年生	12S32	3.214	1.578	4.792	1.637

12S33. 大学に入学したとき、高校で学習した言語を引き続き選択した理由は、書く能力をさらに高めたいと思ったからである。

	ID	平 均	標準偏差	$\mu + \sigma$	$\mu - \sigma$
全 体	12S33	3.580	1.287	4.867	2.293
スペイン語全体	12S33	3.346	1.198	4.544	2.148
スペイン語1年生	12S33	3.583	1.165	4.748	2.419
スペイン語2年生	12S33	3.143	1.231	4.374	1.911

12S34. 大学に入学したとき、高校で学習した言語を引き続き選択した理由は、会話・コミュニケーション能力をさらに高めたいと思ったからである。

	ID	平 均	標準偏差	$\mu + \sigma$	$\mu - \sigma$
全 体	12S34	3.825	1.277	5.102	2.548
スペイン語全体	12S34	4.038	1.113	5.151	2.926
スペイン語1年生	12S34	3.833	1.193	5.027	2.640
スペイン語2年生	12S34	4.214	1.051	5.265	3.163

12S35. 大学に入学したとき、高校で学習した言語を引き続き選択した理由は、聞き取る能力をさらに高めたいと思ったからである。

	ID	平 均	標準偏差	$\mu + \sigma$	$\mu - \sigma$
全 体	12S35	3.686	1.282	4.967	2.404
スペイン語全体	12S35	3.538	1.104	4.642	2.435
スペイン語1年生	12S35	3.583	1.165	4.748	2.419
スペイン語2年生	12S35	3.500	1.092	4.592	2.408

12S36. 大学に入学したとき、高校で学習した言語を引き続き選択した理由は、その言語が話されている地域の文化についてさらに学習したかったからである。

	ID	平 均	標準偏差	$\mu + \sigma$	$\mu - \sigma$
全 体	12S36	3.155	1.399	4.554	1.756
スペイン語全体	12S36	3.385	1.299	4.683	2.086
スペイン語1年生	12S36	3.333	1.155	4.488	2.179
スペイン語2年生	12S36	3.429	1.453	4.881	1.976

大学入学時において、大学全体とスペイン語各グループの四技能の平均を比較すると、学生は四技能をバランスよく高めたいという意識があることを示している。平均値からみた順位は、大学全体が「12S34 会話・コミュニケーション (3.825) > 12S35 聞く (3.686) > 12S32 読む (3.651) > 12S33 書く (3.580) > 12S36 地域文化の学習 (3.155)」、スペイン語全体も同様に「12S34 会話・コミュニケーション (4.038) > 12S35 聞く (3.538) > 12S32 読む (3.423) > 12S36 地域文化の学習 (3.385) > 12S33 書く (3.346)」、1年生は「12S34 会話・コミュニケー

ション (3.833) > 12S32 読む (3.667) > 12S35 聞く (3.583) = 12S33 書く (3.583) > 12S36 地域文化の学習 (3.333)」、2年生は「12S34 会話・コミュニケーション (4.214) > 12S35 聞く (3.500) > 12S36 地域文化の学習 (3.429) > 12S32 読む (3.214) > 12S33 書く (3.143)」である。また高校卒業時に身についたとする「読む能力」と、十分身についたとはいえない「会話能力」の平均値を比べると大きな差もなく、学生は高校卒業時に習得できなかった能力も、またすでに習得した能力をもさらに高めたいという意識がある。また「地域文化の学習」は高校履修開始時の選択理由や高校卒業時の習得能力の中で四技能よりも下位だったが、大学入学時でもスペイン語2年生以外は四技能より下位であり、地域文化への関心が四技能よりも低いといえることができる。

結果として、高校履修開始時と同様に大学入学時において、大学全体とスペイン語全体は対面型コミュニケーションに必要な「話す・聞く能力」の向上が「読む・書く能力」の向上よりも優先されている。またスペイン語各グループでは「会話能力」の向上に対する学生の意欲が大学全体より顕著であり、数値にも表れている。スペイン語各グループでは平均値が3.833から4.214 (3.825)、 $\mu + \sigma$ が5.027から5.265 (5.102)、 $\mu - \sigma$ が2.640から3.163 (2.548) である(カッコ内は大学全体の平均値)。学年別では、1年生は四技能の数値に大きな差はなく、グループの中で最もバランスよく各能力を高めたいという意識が数値に表れている。一方、2年生は他のグループと比べて「会話能力」の $\mu + \sigma$ が5.265と突出している反面、「読む能力」と「書く能力」の $\mu - \sigma$ は1点台であり、1年生ほど四技能間のバランスがよくない。一方、「地域文化の学習」についてスペイン語全体は大学全体よりも少し数値が高く、他の語種の学生よりも「地域文化の学習」に意欲があるといえる。学年別では2年生が全グループの数値で平均値と $\mu + \sigma$ が最も高く、高校履修時よりもさらに地域文化への興味が増したといえる。四技能と比較すると関心や習得状況は劣るが、数値をみると「地域文化の学習」は決して軽視されているわけではない。

7. 高校履修開始時、高校卒業時、大学入学時の比較

この章では高校履修開始時、高校卒業時と大学入学時の3時点における四技能と地域文化に関するスペイン語全体の回答を比較し、数値の推移から学生の意識について考察する。まず「読む能力」と「書く能力」の高校履修開始時と大学入学時の数値を比較すると、スペイン語では2つの能力はともに20%ほど上昇している。スペイン語全体の「読む能力」は、高校履修開始時では平均=2.833、 $\mu + \sigma$ = 4.073、 $\mu - \sigma$ = 1.594、大学入学時は平均=3.423、 $\mu + \sigma$ = 4.842、 $\mu - \sigma$ = 2.004である。また「書く能力」は高校履修開始時が平均=2.615、 $\mu + \sigma$ = 3.851、 $\mu - \sigma$ = 1.380と数値の低さが目立つが、大学入学時は平均=3.346、 $\mu + \sigma$ = 4.544、 $\mu - \sigma$ = 2.148と20%以上、上昇している。一方、高校卒業時の「読む能力」は平均=3.769、 $\mu + \sigma$ =

5.220、 $\mu - \sigma = 2.319$ 、また「書く能力」は平均=3.654、 $\mu + \sigma = 4.917$ 、 $\mu - \sigma = 2.319$ と高い数値を示している。高校卒業時に習得できた「読む能力」を大学入学後も引き続き高めたいという意識が数値の上昇に表れている。しかし「書く能力」は、大学入学時の平均値が高校卒業時のそれよりも若干下がっていることから、高校卒業時にはある程度能力を習得できたものの、大学入学時にはさらに高めたいとする学生は多くない結果となった。これは学生としては「書く能力」の向上よりも、高校卒業時に十分習得できなかった「会話能力」や「リスニング能力」の向上を優先したいと意識が働いているのではないかと考えられる。

一方、「会話能力」と「リスニング能力」に対するスペイン語履修学生の関心は、高校履修開始時と大学入学時の高い数値に表れている。「会話能力」は高校履修開始時では平均=3.846、 $\mu + \sigma = 4.967$ 、 $\mu - \sigma = 2.726$ 、大学入学時では平均=4.038、 $\mu + \sigma = 5.151$ 、 $\mu - \sigma = 2.926$ とほぼ同じ水準である。すでに高校履修開始時の数値が高いため、大学入学時との数値の差が小さい。また「リスニング能力」は高校履修開始時では平均=3.308、 $\mu + \sigma = 4.565$ 、 $\mu - \sigma = 2.050$ であり、大学入学時はこれらが10%弱上昇して、平均=3.583、 $\mu + \sigma = 4.642$ 、 $\mu - \sigma = 2.435$ となっている。また高校卒業時の「会話能力」は平均=3.038、 $\mu + \sigma = 4.494$ 、 $\mu - \sigma = 1.583$ と前述の通り低く、「リスニング能力」を含めた「会話能力」の習得は「読む能力」や「書く能力」よりも不十分である。結果、高校卒業時に習得が十分でない能力は大学入学時の数値が高くなり、入学後に十分に習得したいと考えていることがわかる。

「地域文化の学習」は高校履修開始時では平均=2.792、 $\mu + \sigma = 4.236$ 、 $\mu - \sigma = 1.348$ 、大学入学時では平均=3.385、 $\mu + \sigma = 4.683$ 、 $\mu - \sigma = 2.086$ であり、10%ほどしか上昇していない。一方、高校卒業時の「地域文化の説明できる能力」は平均=2.538、 $\mu + \sigma = 3.872$ 、 $\mu - \sigma = 1.205$ であり、全体の数値は決して高くなく、ある程度説明する能力を習得できた程度にとどまる。「地域文化の説明や学習」は「会話能力」の場合と異なり、高校卒業時に能力の習得が十分でないにもかかわらず、高校履修開始時と比べて数値の伸びも少なく、全体の数値も他の能力に比べると低い。地域文化に対する学生の関心は、実用性の高い四技能に比べると低いということが3時点の比較からも明らかである。

8. まとめ

本稿では、調査実施時点における既習クラスの現況、学生の授業に対する要望、また高校履修開始時、高校卒業時と大学入学時における四技能と地域文化に対する学生の意識について、調査結果を提示するとともに、その結果に対する考察を行った。調査質問票は44問あるが、本稿では高校履修開始時と大学入学時の選択理由の「言語習得の容易さ」(12S20、12S37)と「将来の実用性」(12S21、12S38)、また「気づき」(12S41～12S44)の結果を取り上げていない。今後の課題として四技能以外の選択理由を含めて総合的に学生の意識の考察をすること、また

今回取り上げなかった既習クラスの担当教員の調査結果の分析を進め、学生と教員の意識や見解の相違点を検証していく必要性が挙げられる。最終的な調査の分析結果は、既習クラスの学習環境のさらなる整備を可能とし、さらに学習意欲向上につながるような高大連携の形を考える際に有効であると考ええる。

註) 本稿は、科学研究費補助金 基盤研究 A「外国語一貫教育における複言語・複文化能力育成に関する研究」(研究課題番号: 24242018、代表者: 境一三、期間: 2012年度～2014年度)の成果の一部である。

(1) 本稿では、質問文の文言としてそのまま調査質問票で使用了原文を使用する。